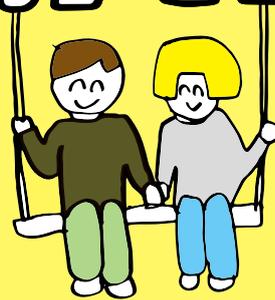


NEW 



INTIMACIES

WILD



 WILD

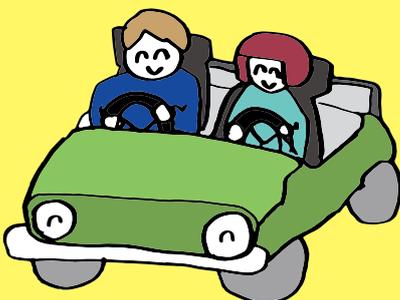


WEST



Soda
+
Gallery
PARC

2022



9.11 - 9.25

普段、アートの世界では、作家性という「個人」を軸とした、美術館での個展、モノグラフ、批評もしくは論考が展開されている。

そこではアーティストと他者との関係性は、脚注に留まる。では、スタジオをシェアしている仲間の作品の無意識な相互影響、食事の時に会話したあるアイデア、一緒に訪れた特別な場所での共通の体験などは、いったいどう作品に記録されているのだろう。

この展覧会は、アーティスト、またはアートに深く関わるカップルを招待する。彼ら、彼女らは、必ずしも常にコラボレーションをする間柄ではない。そこでは批判もあるだろうし、妥協もあるかもしれない。棲み分けのようなものもあるかも知れない。ある時、その関係は何かしら終わりを迎える可能性もなくはない。でもそこにある「親密さ」とは何か？

現代の社会では、テクノロジーの進化や、インターネット、スマホの普及により、どこで今、何が起こっていて、何が話されているのか、私達はほとんど瞬時に知る事が出来るし、遠くの知人の極めてパーソナルな出来事をあたかも身近な事のように共有できる。人と人との関係は世界規模に拡大したけれど、やはりそこでは「親密さ」が通貨となっている。

感情の衝突や、日常性を通して育まれた「親密さ」、テクノロジー・コミュニケーションを介した「親密さ」、相手の作品を理解しようと、通常の鑑賞者以上の努力や好奇心の果ての「親密さ」。このような「親密さ」を通過してアートという価値を共有している(かに思える)自らのパートナーにこの展覧会は焦点をあてる。そしてここでは、出来るならば、カップルとして共同の作業の中で作品を制作していただきたい。カップルは、小さな単位ではあるが、そこには、複雑な関係性が時間軸と感情の軸の中に存在している。その作品は、現代の超高度情報社会において、新たな「親密さ」として通常化するだろう。

文字通り「親密すぎる」関係であるカップルが、展覧会を通じて新鮮な価値を提示し、パブリックな場で交差させることで、ひとつの可能性を開くことができるのではないだろうか。「愛」と呼んだら大げさだが、私達は「New Intimacies/ニュー・インティマシー」を通じてそれを探求する。

本展キュレーション:菅 かおる(soda) + 田中 和人(soda)

Gallery PARC[グランマーブル ギャラリー・パルク]では、アーティスト・田中 和人と菅 かおるが運営するアーティストランスペース「soda」の企画として、2014年・2016年・2020年と開催されてきた「New Intimacies / ニュー・インティマシー」の4回目となる展覧会を開催します。

「New Intimacies」は、プライベートにおいてパートナーの関係にあるアーティスト(あるいはアートに何らかの関わりを持つ者)のカップルが、それぞれ協働・共同により制作した作品を展示するもので、関東圏のアーティストが中心であったこれまでにに対し、本展は「-WILD WILD WEST-」として関西以西に在住・活動する7組・14名のアーティストによって構成します。

「個」を起点とするアーティストにおいて、作品・表現はアーティスト個人の発想・思考のみの産物ではなく、個を取り巻く様々な関係・影響を受けて創造・醸成されたものであるといえます。その複雑で多様な関係性を作品に明確に見出すことは難しいものですが、しかしおよそ表現や作品に至る背景として普遍的に存在しているといえます。

本展はその関係性を『親密さ(インティマシー)』として、作品や表現を通じてその在り方を眼差すものです。そして、多様な関係性におけるひとつの極として、プライベートにおけるパートナーであるアーティストカップルに共同制作を依頼します。「個」を単位とする表現活動において、内在・外在する様々な関係性を一旦はプライベートの「親密さ」に代入し、その回路を用いて共同制作した作品からは、それぞれの関係性や影響関係を見出すことができるかもしれません。あるいは個々のアーティストの表現への理解が進むかもしれません。

テクノロジーやインフラなどの進化により、コミュニケーションのあり方だけでなく、表現媒体や方法、あるいは「表現」そのものの定義も複雑化・多様化する現在にあって、展示された作品に垣間見ることのできる「親密さ」もまた、より複雑なものなのでしょうか。あるいは、そこにより普遍的な「親密さ」を見出すことだってあるだろう。

展覧会名 New Intimacies / ニュー・インティマシー -WILD WILD WEST-

出展作家 厚地 朋子 + 山下 耕平 / 今村 達紀 + 林 葵衣 / 大屋 和代 + 田中 秀介 / 菅 かおる + 田中 和人 / 楠井 沙耶 + 黒川 岳 / 小西 景子 + 西村 涼 / 増本 奈穂 + 増本 泰斗

関連サイト <https://ja-jp.facebook.com/intimacies>

会 期 2022年9月11日[日] — 9月25日[日] 13:00~19:00 水・木休廊

入 場 無料

主 催 ギャラリー・パルク + soda

〒602-8242 京都府京都市上京区白茱町287 堀川新文化ビルディング 2階 MAP

TEL 075-334-5085(T) FAX 075-334-5360(F) MAIL info@galleryparc.com HP www.galleryparc.com

アクセス ○地下鉄烏丸線「丸太町」・「今出川」駅より徒歩約20分

○地下鉄東西線「二条城前」駅より徒歩約18分

○京都市バス9番・50番(JR京都駅から約22分)・12番(阪急烏丸駅から約15分)・67番(阪急大宮駅から約12分)系統「堀川中立売」バス停下車徒歩1分

○駐輪場・駐車場(3台)有 ※満車の場合は近隣のコインパーキングをご利用ください。

出品作家

Atsuchi Tomoko (artist)

厚地 朋子

<http://atsuchitomoko.com>

1984年生まれ、京都府出身、京都にて制作活動

2010年 京都市立芸術大学大学院美術研究科絵画領域 修了

2008年 京都市立芸術大学美術学部美術科油画専攻 卒業

+

Yamashita Kohei (artist)

山下 耕平

<https://koheiyamashita.jimdofree.com>

1983年生まれ、茨城県出身、京都にて制作活動

2008年 京都市立芸術大学美術学部構想設計専攻 卒業

2010年 京都市立芸術大学大学院美術研究科絵画専攻造形構想修了

様々な素材や方法論を用いながら、主にコラージュ的技法による平面・立体を中心としたインスタレーションを発表する。「山」を対象として、登山を実践することで獲得するリアルな身体経験や記憶、また登山用具や山岳史といったアウトドアカルチャーを積極的に取り込んだ表現を試みる。「遠い」「近い」といった距離感覚・時間・スケールの混ぜ合わせで生まれる「遠近」のズレ、その歪みを起点とした測り直しによって現在位置の再認識を促す。



厚地 朋子
《君の外は私の内(3人の喫煙者)》
2021 パネル・キャンバス・油彩 145×112cm



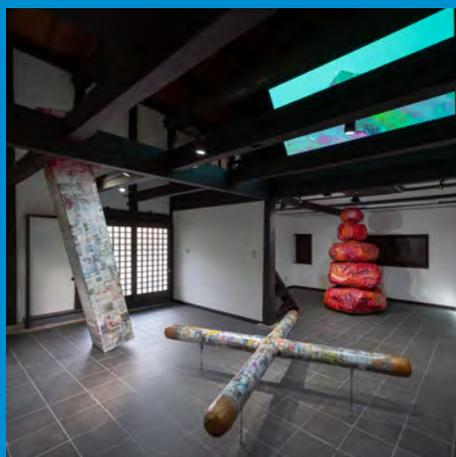
厚地 朋子
《盆地的空間認識 #2》
2021 パネル・キャンバス・油彩 160×120cm



厚地 朋子
《合格》
2019 パネル・キャンバス・油彩 59×61cm



山下 耕平
《静かに激しく続いていく》
2021 ミクストメディア
「Kyoto Art for Tomorrow 2021 一京都府新鋭選抜展一」(京都文化博物館)
撮影:TAKANO Tomomi



山下 耕平
《TRAIL》
2021 インスタレーション
「山怪~異世界への憧れと畏れ」(瑞雲庵/京都)
撮影:TAKANO Tomomi



山下 耕平
《The Yellow Mountain》
2021 インスタレーション
「たつのアートシーン2021」(あの劇場 元箱詰め工場/兵庫)
撮影:TAKANO Tomomi

出品作家

Imamura Tatsunori (dancer)

今村 達紀

https://www.youtube.com/channel/UCTM_8yLxIN-9ZT8K7p6pV7w/videos

大学から演劇をはじめその延長で踊りをはじめ。劇場以外にも教会、寺、バー、ライブハウスなど様々な場所で踊る。最近では野外で録音した音、紙に描かれた地図や化学式などをつかってソロパフォーマンスも行っている。ある音楽家にいわせると、「光の射す厨房で和菓子を丹精につくっているような」ダンスを踊る。

+

Hayashi Aoi (artist)

林 葵衣

<https://www.hayashiao.com>

音声をはじめとする身体のふるまいに独自の形を与え提示している。展示会場での公開制作やワークショップを行うなど、幅広く活動を展開。関西を中心に個展、グループ展にて作品を発表。

身体は心拍の影響、呼吸による喉と唇のふるえ、記憶の歪みなどから自分の意図通り完璧には動かせない。これまで反復によるずれ、色彩の残像、音声の保存をテーマにした作品を制作してきた。自分のものではないようにもどかしく思う見えない身体のふるまいと対話し、目に見える形を与え、提示している。



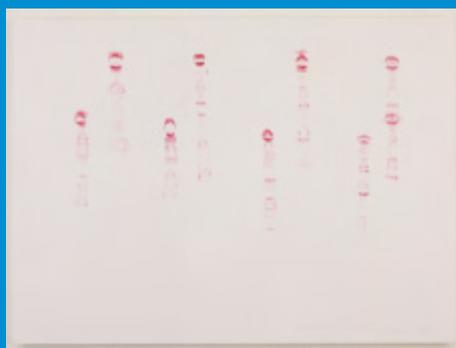
今村 達紀
《ECHO軌響躍 7th》
2020 京都芸術センター / 京都
©kojohn!



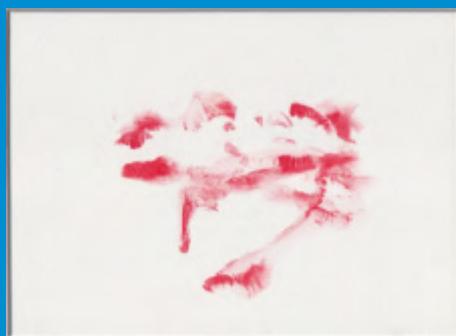
今村 達紀
今村達紀×仙石彬人《上ル (+) / 下ル (-)》
2021 ギャラリー16 / 京都
「映像は発言する!2021 YouTube配信ライブB」
©Shimpei Murayama



今村 達紀
2020 「すべてしるべ 2020」 パフォーマーとして出演
©森生田兵吾



林 葵衣
《いろは歌》
2019 キャンバス、口紅 1303×970mm



林 葵衣
《Phonation -palindrome-》公開制作映像スチール
2021

林 葵衣
phonation-question-《袋いりますか?》
2020 額縁用台紙に口紅、レシート 230×170mm

出品作家

Oya Kazuyo (homemaker)

大屋 和代

2006 California College of Arts 留学

2007 大阪芸術大学 芸術学部 美術学科 彫刻コース卒業

外を歩く 植物のひろう

つらつらと それらと向き合い 素材と向き合い

対話をし つくる



大屋 和代
《かまえ》
2012 蜜蝋・ダンマル樹脂・真鍮・木



大屋 和代
《稜線》
2114 真鍮・紙・木

+

Tanaka Shusuke (artist)

田中 秀介

<https://shusuketanaka.jimdofree.com>

2009 大阪芸術大学 美術学科 油画コース 卒業

寝て、起きて動きだす。動き出すと見渡す。見渡し、それは自発的か偶発的かやがてそこの何かと対峙する。

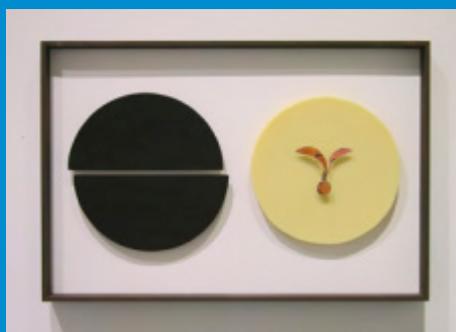
対峙すると、そこに在るあらゆる物事が合致した状況が、光景として一挙に私の眼前に立ち現れる。

それはあまりに複雑に入り組んでいるものの、あからさまに一つとして立ち現れ、そしていつしか更新され、同じ光景を目の当たりにする事はない。

このとりとめのない、しかし歴然とした、常に更新される光景を、どうにか腑に落とそうとしている。

これらを腑に落とす術として、光景の体現に取り掛かる。この体現への取り組みが私にとって描く事となる。

何を指し示すかわからない光景は、描く事で何かを指し示す光景へと体現され、絵となる。



大屋 和代
《うつしみ》
2014 蜜蝋・ダンマル樹脂・銅・炭・木・紙



田中 秀介
《帆が示す方々》
2022 油彩・キャンバス 162×194cm



田中 秀介
《いつしか楽屋》
2022 油彩・木製パネルにキャンバス 143×107cm



田中 秀介
《突貫屋敷景》
2021 油彩・木製パネルにキャンバス 250×147cm

出品作家

Kan Kaoru (artist)

菅 かおる

<https://www.kaorukan.com>

1976年大分県生まれ。

2000年京都造形芸術大学芸術学部美術科日本画コース卒業。2004年京都造形芸術大学国際芸術研究センターフェロープログラム研究員。

伝統的な日本画の技法を用い、根源的でプリミティブなイメージを想起させる絵画表現を探究。「内と外」の入口の象徴として変幻する「水」をモチーフに制作している。



Tanaka Kazuhito (artist)

田中 和人

<https://www.kazuhitotanaka.com>

1973年埼玉県生まれ。

明治大学商学部卒業後、会社勤務を経て渡米。2004年 School of VISUAL ARTS (ニューヨーク) 卒業。

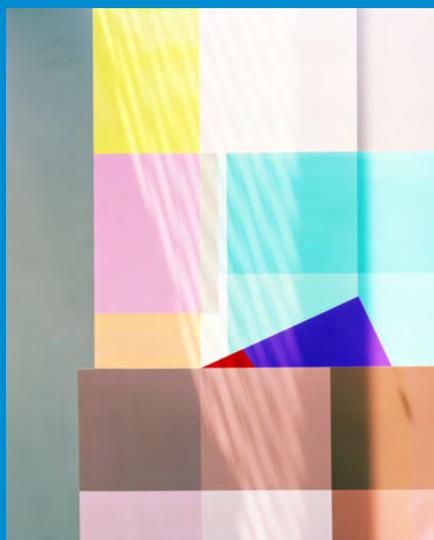
写真と絵画との関係を軸としながら、写真による抽象表現を探究し、国内外で作品を発表。また展覧会の企画も手がける。京都ベースのアーティスト・ラン・スペース「soda」ディレクター。京都、福岡を拠点に活動。



菅 かおる
《AQUA (blue)》
2022 雲肌麻紙に岩絵具 727×727mm



菅 かおる
《origin(black circle)》
2022 雲肌麻紙に岩絵具 333×242mm



田中 和人
《Untitled Composition #1》
2011 C-print



田中 和人
《GOLD SEES BLUE #1》
2009 C-print



田中 和人
《blocks (light) #9》
2013 C-print

出品作家

Kusui Saya (artist)

楠井 沙耶

1993 大阪府生まれ

2016 京都市立芸術大学美術科彫刻専攻卒業

2018 京都市立芸術大学美術研究科彫刻専攻修了

周囲の環境と独自に関係を作る方法を模索しています。



楠井 沙耶
《綿迎え(メタセコイヤ)》
2022 ラムダプリント



楠井 沙耶
《フランルーチ》
2017 木、土、モルタル、ミクストメディア

+

Kurokawa Gaku (artist)

黒川 岳

<https://gakukurokawa.com>

1994 島根県出雲市生まれ

2016 東京藝術大学音楽学部音楽環境創造科卒業

2018 京都市立芸術大学大学院美術研究科修士課程彫刻専攻修了

2018年～ 京都市立芸術大学美術学部非常勤講師

音を奏でることや聴くこと、あるいは様々な対象に「触れる」という行為への考察を出発点に、彫刻やパフォーマンス、映像、音楽などの手法を用いて作品を制作している。



楠井 沙耶
《灰原池・坊ヶ池・新池の観察》
2020-2022 コピー用紙、インクジェットプリント、鉛筆



黒川 岳
《listening to stone》



黒川 岳
《Voices of Kamegame (Tokoname Jars)》
撮影: 三浦知也



黒川 岳
《Singing Objects (Yuba Factory)》
撮影: 前端紗季

出品作家

Konishi Keiko (artist)

小西 景子

2022 個展「Current location」(アートゾーン神楽岡・京都)

- ON PAPER (TAKU SOMETANI GALLERY・東京)

2021 個展「水の影、光の粒子」(TAKU SOMETANI GALLERY・東京)

2020 個展「浸透する光の姿」(アートゾーン神楽岡・京都)

- こえる、境界線 (no-mu・京都)

2019 個展「Imitation of south wind」(芝田画廊・大阪)

2019 個展「Co-shape」(TAKU SOMETANI GALLERY・東京)

自身が撮影した写真を、自身の手で印刷している。毎回、何らかの方法を使って、紙の上で写真が物質として存在していることを強調している。

+

Nishimura Ryo (artist)

西村 涼

https://www.instagram.com/ryonishimura_works/

2022 ON PAPER (TAKU SOMETANI GALLERY・東京)

- 第3回 PATinKyoto 京都版画トリエンナーレ 2022 (京都市京セラ美術館)

- 個展「わだちをなぞる」(アートゾーン神楽岡・京都)

川の水面、植物や風景など日常はとりとめないものたちから成り立っている。それらは、私の生きるという物語の欠片であると同時に、他者の物語の欠片でもある。更には、私達が生まれる前から積み重ねられてきた壮大な生の物語とも言える。

自分はその欠片たちを版やスケッチ、写真を通して日々トレースしている。それは、本来形を持たない生命の移ろいを、確かにそこにあった流れの軌跡に置き換え、自身のイメージとして留める事でもある。



小西 景子
《木の影》
2022 シルクスクリーン



小西 景子
《南風の模倣》
2019 デジタルプリントにシルクスクリーン



小西 景子
《断層》
2022 シルクスクリーン



西村 涼
《生命の回路 3》
2022 ドライポイント、ホワイトワトソン紙、銅版インク 1600×1000mm



西村 涼
《"うち"へ還る 2》
2022 ドライポイント、ホワイトワトソン紙、銅版インク 1600×1000mm

出品作家

Masumoto Naho (Hozonshoku Lab)

増本 奈穂

<https://www.instagram.com/hozonshokulab/>

伝統的な保存技術を現代の食卓に応用することを日々探究しています。



増本 奈穂
グリーンソース(保存食labの商品)



増本 奈穂
フレッシュゆず胡椒PIRIRI(保存食labの商品)

+

Masumoto Yasuto (artist)

増本 泰斗

<https://www.yasutomasumoto.com>

オルタナティブな思考を日々探求しながらコツコツ実践しています。



増本 奈穂
ピーツケチャップとハラペーニョピクルス(保存食labの商品)



増本 泰斗
おすぎパン2。お食事処の九時五時さんのレシピをダブしたカンバーニュ。



増本 泰斗
フードコート2。とあるフードコートのバージョン2の実践。
〇〇AIRという鳥取県倉吉市を拠点としたアーティスト・イン・レジデンスプログラムに参加したときの実践のひとつ。



増本 泰斗
料理家の太田夏来が作ったローストビーフを目で盗んだローストビーフ。森野義の削り節でひいた出汁に浸かっている。